

FIREを噛み締めた、3つの食卓

【プロローグ】沖縄の風と、1億円という途方もない夢

「いつか1億円貯めて、あの島に移住する」

独身時代、私は酒の席でそう豪語するのが口癖でした。友人たちは最初こそ感心してくれましたが、何度も聞かされるうちに苦笑いに変わっていきました。それでも私は懲りずに言い続けました。口に出すことが自分への「縛り」になると信じていたからです。

きっかけは、2008年10月のことです。会社の「長期休暇取得制度」で丸々1週間の休みをもらい、一人で沖縄本島～八重山諸島へ旅したことでした。くしくもその月は、リーマンショックの直後。世界中の株式市場が奈落の底へ落ちていくさなか、私は呑気にサトウキビ畑の中を歩いていただけです。

青く透き通る海、どこまでも続くサトウキビ畑、時計の針に急かされることのない日々。朝起きて、海を眺め、腹が減ったらソーキそばをすすす。分刻みのスケジュールで動く当時の私にとって、あまりにも鮮烈な体験でした。島の穏やかな空気の中で「今持っている投資資産は長期で持ち続ける。それだけだ」と腹を括り直した私は、「1億円貯めてこの島で暮らしてやる」という、ロマンだけはちょっと前の目標を心に刻みました。計算の根拠など何もありません。ただ、区切りがよくてなんとなくカッコいい数字というだけの理由でしたが、その後、結婚して家族ができて、その目標だけはブレませんでした。それが、私が「早期リタイア」という概念に憧れた原点でした。

それから十数年。53歳になった私は、ついにその目標を達成し、28年間勤め上げた会社を辞めることとしました。

人生の節目には、必ず「食」の記憶が伴うものだと思います。食事とは単なるカロリー補給ではなく、その時の感情や状況を封じ込めた「タイムカプセル」のようなものだと、私はこの年になって実感しています。

これからお話しするのは、FIREというゴールテープを切る前後で味わった、忘れられない「3つの食卓」の記憶です。どれも高級レストランではありません。でも、私の人生において、何物にも代えがたい味がしました。



FIREという夢の原点。
腹を括り直しながらすすった「ソーキそば」と「ジューシー」。